

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 24 年目
創刊 1989 年 No.277

GEKKAN-WIEN 2012年7月号



Portrait Emilie Flöge, 1902 Gustav Klimt Öl auf Leinwand
© Wien Museum



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 10



六月四〜五日に韓国の浦項(ポハン)工科大学において、同大学と韓国原子力研究所の共催により「福島事故後の原子力安全と環境汚染の課題」此処から何処へ向かうべきか」と題する国際ワークショップが開催された。福島第二原子力発電所の現状と事故の教訓を再確認し、世界の原子力界の各グループが取り組んでいるリスクの観点からの重要課題を共有し、福島と似た事故の再発を防ぐための現在の能力と知識を評価し、今後の技術トピックに合致した研究の方向性について討論するのが目的である。日本からは筆者を含む五名、世界八ヶ国から二〇名の原子力安全と環境汚染に関する専門家が招待され、地元韓国を含め約百五〇名が参加した。四つのセッションで十五件の報告があり、二日目の最後にパネル討論が行われた。筆者は「原子力安全」セッションにおいて、福島事故後のシビアアク

シデント研究への日本の視点」と題する報告を行い、福島事故で得られた教訓に基づき、今後重要となるシビアアクシデント研究課題について私見を述べるとともに、日本原子力学会の関連活動を紹介した。原子力安全と環境汚染の両分野における専門家が集まり、今後の課題について活発な議論を行うことができた。会合の事務局長は、同大学に最近教授として移った韓国人で、筆者が原子力機構の炉心損傷安全研究室長時に米国の大学から研究フェローとして三年間滞在した。また、韓国原子力研究所から参加した人も、筆者の研究室に半年間滞在している。かつての研究仲間と再会できたのが大きな喜びであった。

続ける喫茶店が何軒もある。例えば、昭和五年創業、大きなテールで有名な京大前の進々堂、昭和七年創業、小屋風インテリアのスマート珈琲店、文化人・芸術家が集まった昭和九年創業のフランソワ喫茶室、同年創業で築地小劇場にちなむ築地、昭和十年創業、アーランド調剤員の雲仙、先斗町の芸妓さんが始めた昭和十二年創業の静香などである。これ以外にも、洗練された雰囲気のカフェドジャヤウィッシュ、学生に人気のあるサラサ、アンデパンダン、さらに平安神宮近くのジャズ喫茶YAMAOTOYAなどがお奨めである。いずれも両市の市民や観光客を惹きつけてやまない。



さて、筆者の近況報告はここまでとじて、今月もウィーンと京都の共通点に関する話に移るが、今回は両市のカフェを紹介したい。ウィーンのカフェは、一六八三年、オスマン帝国による第二次ウィーン包囲の際にトルコ軍が忘れていったコーヒー豆が発見されたことに始まると言われている。一九世紀にはウィーンのカフェは文化生活の中心であり、現在でも当時と変わらぬ姿のカフェは多い。旧皇室御用達のカフェは、一八四七年創業のゲルストナー、ザッハルトで有名なメル、シテファン寺院近くのハイナールなどがある。ウィーンの文人・芸術家が愛用したカフェは、王宮近くのツェントラル、ブルク劇場そばのラントマン、グリーンエムシユタイデル、ムーゼウムなどがある。

余談であるが、筆者はウィーン在住時、休みの日によく家内とカフェ巡りをした。国立歌劇場でオペラを観て、すぐ裏のカフェ・モーツァルトで軽食を取っていたら、先程までテナーを歌っていた地元出身の歌手が入ってきたこともあった。美術史博物館内にあるゲルストナー支店(当時)は絵画鑑賞の休みとして特に気に入っていた。その関係で同博物館のスケッチを掲載させて頂く。

■杉本純
京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長